

せんだんのき

中原小学校 学校だより

令和7年3月25日

TEL 42-2110

令和6年度 学校評価について

3月4日(火)に学校評議員会・学校運営協議会(コミュニティ・スクール)を開催しました。学校評価については、12月に実施しました児童・保護者のみなさんのアンケート結果や学校の自己評価をもとに、年度当初に設定した目標を達成できたかどうかを示し、それについて各委員の皆さんからご意見をいただきとりまとめましたので、ご報告させていただきます。

項目	自己評価	学校等関係者評価
成果 (強み)	地域を題材にした学習活動に取り組み、まちづくり協議会・公民館・社会福祉協議会などを窓口として豊富な人材を得ることができた。子どもたちは地域と関わる学校行事は特に強い興味関心を持って取り組んでいる。このような体験活動から探究活動へと展開する学習にとりくむことができた。今年度は特に卒業生で五輪選手の川端選手と交流できたことが子どもたちの将来にとって良い刺激になった。また、基礎学力定着のため学習規律の確立や「直し」の徹底等に取り組んできた。	・地域と学校が連携した体験学習や学習講座は、計画的に運営されている。もっと学校から、「こうしてほしい」という要望を遠慮なく出してほしい。それにより、新しい地域の逸材を探し出すこともできる。 ・最近、特に農業体験について、土を触った経験がない児童も多く、サツマイモ苗を植えて、収穫する体験は子どもたちにとってとても良い生活体験になっている。
課題 (弱み)	基本的生活習慣や学習習慣の定着について、学校からの啓発活動をすすめているが、まだまだ改善の余地がある。特に、早寝・早起き・朝ごはんや家庭学習、家庭での読書習慣(家読)などについては、引き続き、保護者・家庭へのはたらきかけや意識づけにとりくんでいかなければならない。特に家庭での読書の習慣づけが課題である。また、不登校等の様々な課題を抱えた子どもたちの居場所作りや学力進路保障も含めて、学校としての柔軟な対応を模索していく必要がある。	・学校創立150周年の今年度、保護者や地域の力を借りてのドローン撮影ができたこと、卒業生であるパリ五輪出場の陸上選手、川端魁人さんに夢について子どもたちに語っていただいたことは、中原の子どもたちにとって特別な体験となった。地域としても誇りを感じる出来事だった。 ・基本的生活習慣の習得においては、家庭・地域の力も重要である。時には嫌われ役になってもいいから、マナーや礼儀、思いやりなどを教えていく必要がある。
改善策	学校から保護者への情報発信方法を工夫し、学校だより、メール配信、タブレット、Webページなどの活用によって、情報共有できる環境を今後もつくることで、保護者・家庭・地域との連携を図っていききたい。また、学力の定着をめざし、タブレットのドリル教材等を家庭学習等にも活用し、個々に応じた学習課題にとりくむことで、個別最適化を推進し、誰一人取りこぼさないようにしていく。読書については委員会や司書の活用も行いたい。今後もさらなる地域学習や体験学習を推進する上で人材発掘等をすすめていく必要がある。	・読書の習慣づけは、学力保障の上でも重要である。活字に触れる経験を増やしていく必要がある。 ・学校で何をしているか、何を学んでいるか、学級通信や学校だより、ホームページなどでしっかり発信していかねばならない。また、中原の子どもたちが地域に残って暮らしたいと思えるようにしていきたい。

項目	自己評価・達成状況	学校関係者評価
豊かな心と体	①「学級の仲間とだれとでも楽しく過ごしている」については児童 67%(93%)、保護者 59%(90%)の回答がある。また、相談できる友だちがいる児童が 57%(89%)いる。中学校区9年間の人権教育カリキュラムを確認し、実践ができた。 ②特別な支援が必要な児童についての指導計画を策定し、職員会議、研修会の場で情報共有を定期的におこなった。 ③早寝・早起き朝ごはんについて、児童 85%、保護者 89%、教職員 100%の肯定的な回答であるが、児童・保護者へのさらなるはたらきかけが必要である。	・あいさつに関するアンケート回答が、子どもと大人(保護者・教職員)では意見が少し違っていた。子どもはあいさつをした時点で「できている」と考えるが、大人は「大きな声で」「はっきり」相手に伝わってこそ「できた」という評価をするため、現状のあいさつではまだまだと感じるという意見が出た。その中で、最近是不審者の問題もあり、一概には指導しにくい面もあるとしたうえで、子どもたちに根気よくあいさつを行うことを続けている評議員さんが、「顔見知りになって慣れてくるといいみたい。」という体験を披露してくださいました。学校内だけでなく、地域に出た時も礼儀正しくあいさつできるように粘り強い指導が必要である。 ・本を読む習慣作りについては、中学校や幼稚園でも話題に上っている。家庭読書の習慣は、タブレットやスマートフォンの普及により、動画視聴に押されている現状がある。しかし、ゲームのように画面を読み飛ばすのではなく、マイペースで一字一字読む読書は、国語の読み取りにおいても有効であると考えます。その丁寧さが正確な読解力につながるだろう。読書に興味を持たせるための取り組みとして、読み聞かせがあるが、現在ボランティアさんの協力を得て、1・2・3年生で月1回の読み聞かせを行っている。長寿会(敬老会)の朗読会に2・3・5年生が参加させてもらったのはとても良い経験だった。これからも地域の力を生かしていきたい。
確かな学力	①「学習がわかる」という項目については児童 57%(89%)、保護者 48%(87%)の回答がある。さらに「能動的な聴き方」を大切にした授業改善を継続する。 ②教職員の適切な支援については 55%(100%)の回答となった。 ③タブレットの授業での活用並びに家庭学習におけるドリル教材の計画的な活用を継続して実施した。	
人と人とのふれあい	①全学年が授業規律としての「中原スタンダード」に沿って授業を行うことで、学年が進んでも統一されたルールで授業ができた。 ②出前授業として11回、体験学習として21回地域の方にお越しいただくことができた。 ③児童会主催の運動を展開した。あいさつができるという回答は、児童が 67%(96%)、保護者が49%(90%)教職員 18%(91%)であった。	
特色ある教育課程	①安心・安全な学校づくりについては、保護者 65%(95%)、教職員 55%(91%)の回答がある。通学路等は検討中である。地震・津波、火災、不審者を想定した避難訓練を 3 回実施し、一次避難は 3 分程度で完了できた。 ②理科や家庭科において環境についての学習を行っている。 ③教育講演会や異世代交流会などを実施した。	
連携した教育	①全学年が地域を題材にした学習活動が実施できた。 ②児童の活動を最大限に保障し、21回の体験学習、21回の校外学習、11回の出前授業、15回以上の児童会・委員会主催のたて割り班活動を実施した。また、縦割り班掃除を実施した。 ③後期には、図書委員会主催の図書フェスティバルを開催した。また、図書の紹介も行った。読み聞かせボランティアの活動も復活した。	

※アンケートの数値は、 例 67%(93%) 63%が「そう思う」の数値、(93%)が「どちらかと言えばそう思う」を加えた肯定的な回答の数値を表しています。